

【第1回】 R4.9.28 @ ドーンセンター 特別会議室

- (1) 大阪府アルコール健康障がい対策推進計画の進捗状況について
- (2) アルコール関連問題啓発週間について
- (3) その他

【第2回】 R4.12.7 @ ドーンセンター 大会議室2

- (1) アルコール関連問題啓発週間における取組みについて
- (2) 断酒・減酒の考え方について
- (3) その他

① 大阪府アルコール健康障がい対策推進計画の進捗状況について

- * 事務局から、計画の進捗状況報告として、専門医療機関の情報提供、広報、啓発に関する取組み等について報告
- ・最近では**若者向け**にSNSを使ったり、インターネットを使う広告が増えており、**動画配信サイトでも不適切な飲酒を助長するような発信がされている**。また、国税庁が若者にお酒を飲むことを勧めるための事業を行っていることも問題。
 - ・アルコール依存症で肝臓を悪くされている方が精神科クリニックに紹介された場合、本来ならアルコールの専門医療機関につなぎたいところだが、様々な科をたらい回しにされて不信感いっぱいになられている方に専門医療機関へとは言いにくく、**一般医療の中で、アルコール依存症の方に対応できるよう医療機関への啓発が必要**。

② アルコール関連問題啓発週間について

- * 事務局から、アルコール健康障がいの啓発パネルについて紹介。修正点について意見を伺った。
- ・昔は、「適正飲酒」という言葉があったが、**今では「リスクの少ない飲酒」という言い方になってきている**。
 - ・若者はデジタル画面に親しんでおり、紙よりもデジタルのサイネージやパネルを好む。対象とする層によって啓発の仕方、**発信方法は同じ場所であっても変えることが必要**。
 - ・公共交通機関、駅やバス停、人間ドッグの会場、ワクチンの接種会場などは**人が集まり、何となく手持ち無沙汰な場所なので見てもらいやすい**。
 - ・**アルコールは自殺と密接に関係があるため、駅にポスターを貼ってもらえるのではないか**。
 - ・**短時間のあいだに大量に飲酒する「ビンジ・ドリンキング（一時多量飲酒）」について、以前から外国では危険性を言われており啓発が必要**。
 - ・**女性向けの啓発パネルには、女性は様々なしんどさやトラウマを抱えてアルコールを飲み過ぎている人たちが増えていることや、回復可能であることや、相談してほしいことを入れてほしい**。
 - ・**「妊娠中・授乳中は禁酒をしましょう」という文言を見て「気をつけよう」と思う人は健康度の高い人**。妊娠中は飲んではいけないけれども飲んでしまう人のことを考慮して、**「でも、飲んでしまうときには、ここに相談しましょう」というような文言を入れてほしい**。
 - ・高齢者にとって認知機能の低下ということは一番関心が強いので、**アルコールが認知症の原因になるということを、高齢者の飲酒のパネルに入れてほしい**。

③ アルコール関連問題啓発週間における取組みについて

- ・主要な駅前での啓発用のポケットティッシュの配布/リカバリーパレードへの参加/市町村の健康展でのパネル展示や、依存症についての啓発動画を掲示、等

④ 断酒・減酒の考え方について (委員発言を一部要約)

- ・飲酒量低減、減酒がハーム・リダクションだという意見が広まっているが、例えば飲食店で減酒してもハーム（害）である飲酒運転がなくなるわけではない。また、**アルコールによって虐待、家庭内暴力、家族の不安がある場合も、減酒をしたらそれらがなくなるわけではなく、「減酒＝ハーム・リダクション」という考え方は誤り**。
- ・飲酒運転には禁酒指導が行われるべき。断酒治療にのらない人については、本人の考えに寄り添いつつ経過を見ていく必要がある、この中には**「減酒への試みに付き合う」という意味で、減酒指導ということがあり得る**と思われる。
- ・**断酒を目指している方と、減酒を目指している方が自助グループで一緒に活動することは、おそらく難しい**と思われる。しかし、年齢も若く本人自身が問題意識をもっており、社会生活、家族関係が何とかできているのであれば減酒で構わないと考えている。しかし、**医療で「アルコール依存症」と診断された場合には、断酒という方法を勧めていただくことになると考えている**。
- ・**初診の段階で、断酒の決心に至っていない方が多くおられる**。減酒では難しいという結果が出ていても断酒を選ばない方もおられるが、本人のニーズに沿いながら支援を続けることもある。**支援が切れないことが大切**。
- ・アルコール依存症と診断された方、それに近い方の家族の多くは、辛いこと、嫌なことを感じてきている。そのような中で減酒を始めて、家で上手に飲めている時はよいが、「今日はもう1本飲もうか」となってくると、家族は不安な気持ちになり、嫌な気持ちにもなる。家族の気持ちを考えると、**減酒に理解がないわけではないが、家族の気持ちも理解してほしい**。
- ・減酒治療の先はよくわかっていないところも多く、短期間でみると少し状態がましになったという結果が出たとしても、2年や5年後はどうなるのかはわかっていない。**海外では、減酒を選択した人が5年後や長期的に見ると、危険なレベルの飲酒の人が多かったという報告がある。減酒はとても安全な方法、とはいえない**。
- ・最終的には本人が選択することだが、治療と支援は続ける必要があることに変わりはない。**減酒がクローズアップされているが、ご本人が減酒だということからと安易にそのまま受け入れるというよりも、やり取りの中でできるだけ断酒に向けたような働きかけをしなければならない**。